

[36] ピナ・バウシュ の タンツテアター

～観客の心をもみほぐす力～

1996年2月23日 東京新聞 夕刊

人は何をもとめて劇場に行くのだろうか。

古代ギリシャのアリストテレスは演劇論『詩学』のなかでトラゴーディアの目的は情緒のカタルシスであると言った。カタルシスという言葉は現在でもよく使われるが、もとは医学の用語で、体内に生ずる体液のうちの有害なものを排除するという意味だそうである。トラゴーディアつまりギリシャ悲劇は、言ってみれば人間の壮絶な運命に対して英雄的な人物たちが吠えたけるといった感じのものだから、それを見た観客が文字どおり「毒気を抜かれ」心も晴れ晴れと家路をたどるというのも分からない話ではない。あれに比べれば私の不幸なんか取るに足らない、というわけである。

現代のピナ・バウシュもまた、自分が演出振付する舞台作品が観客にどういう作用をもたらすか、十分に意識している人だ。

一九四〇年にドイツに生まれ、ドイツ表現主義の舞踊を学んだのちニューヨークで「苦悩のバレエ振付家」チューダーの指導を受ける。帰国後、芸術大学で教鞭をとりつつプリマとして舞台に立ったが、一九七三年にヴツパタル舞踊団の芸術監督になって以来、衝撃的な話題作をつぎつぎに発表し、八〇年代からは、世界で最も注目される振付家の一人で

[36] ピナ・バウシュ の タンツテアター

～観客の心をもみほぐす力～

1996年2月23日 東京新聞 夕刊

ある。

見たところは疲れたような表情の、静かな目をした中年女性だが、しかし彼女の作品からは底の知れないスケールの大きさが感じられる。

まずは大掛かりな舞台装置。ピナ・バウシュの名を全世界に知らしめた『春の祭典』では、四^キの土が舞台を覆いつくした。また一九八九年の来日公演でも一万本のカーネーションが話題をさらった。幕が上がった途端に舞台そのものを広大な宇宙と感ぜさせてしまう圧倒的な迫力が、彼女の特質である。

しかしそこに展開するのは、とても単純で親密な言葉や動きであったりする。たとえば男に身を投げかける女。こども時代のことを小声で語る男。一人ぼっちのバースデーを祝う娘。どこにでもありそうで、誰でも経験したことのある小さな小さなエピソードが、現代社会に生きている私たちの心のひだを探る。なんでもないことだが、小さな痛みをあたえずにおかないこと、できれば目をそらしていたいこと。そうしたことが演じられるのを見ると、観客は共感を覚えてふっと笑いたくなる。それが続くと、もう分かったよ、と言いたくなる。しかしそれでもピナは止めようとしめない。観客はちよつとうんざりし、ぐったりして、やがて自分が舞台から発する波

[36] ピナ・バウシュのタンツテアター

～観客の心をもみほぐす力～

1996年2月23日 東京新聞 夕刊

に揺すぶられていることに気づくのだ。その感じをたとえて言うならば、自分でも凝こっていることがつかずにいた体の節々を丹念に執拗に、もみほぐされていくのに似ている。

ピナ・パウシュの舞台はある意味で精神のマッサージである。彼女の作品では、踊りも叫びも、そうした会話や言葉から生まれる情動の、揺れの極点としてある。日常的なさりげない行為や親密な会話を、まるでゲームのように繰り返していくと、揺れはいつか際限もなく大きくなり、動きはめくるめく踊りとなって、声は天をつんざく叫びとなる。そして観客は、ほかでもない自分のかたわらに深淵がぱつくりと口をあけていることに気づくのである。それは愛と憎しみ、執着と孤独が一体をなしているような、人間存在にとって不可避の宿命である。そういえばギリシャ悲劇の多くも、結局は家庭内の愛憎劇だった。大切なことはいつも、とても身近で、とても根が深い。

踊りがまたすばらしいのだと、ことさらに言わなければならぬ。というのもピナ・バウシュの「タンツテアター（ドイツ語で「舞踊劇」）」は、ギリシャ悲劇をふくめた古代の舞台芸術のほとんどがそうであったように、台詞と動作と音楽と舞踊が混合し

[36] ピナ・バウシュ の タンツテアター

～観客の心をもみほぐす力～

1996年2月23日 東京新聞 夕刊

たものだからだ。思いがあふれ極まって歌や踊りになる。歌とか踊りというものは本来そのように精神の高揚の極致として生まれるはずのものなのだが、時代が下るにつれて、音楽のみ舞蹈のみの舞台芸術が主流になっていった。感動のエッセンスだけを取り出したということもできるが、そのために芸術はテクニク偏重となり、古代の芸術がもっていた精神の「癒し」としての効力を失ってしまったことも事実である。ピナ・バウシュは現代の舞蹈作家として最高水準の技術、ほとんど学識ともいべきものを修得した人だが、にもかかわらず、いやおそろくはそれゆえに、舞蹈の根源的な生命力を一番深いところからとらえ直そうとしたのではないだろうか。だから彼女の作る舞蹈作品は、極度に洗練されたものでありながら同時に胸をかきむしり、肌身にこたえるものとなりえているのである。

ピナ・パウシュの舞蹈劇は、登場人物や私たちが抱えている問題に対して何も答えは与えてくれない。絶望はやはり絶望のままだ。しかしそれを抱えて生き続けようという勇氣、精神のしなやかさを回復してくれることは確かである。